

研究主題

卒業後の生活につながる力をはぐくむ

～生徒の実態に応じた目標設定と自己評価方法の工夫～

1 主題設定の理由

前回の高等部研究（R2～R3）では、「学びに向かう力を育む授業づくり～観点別評価を通じた体系的な取り組み～」をテーマとして、新学習指導要領の3観点に基づいた授業の目標立てや自己評価項目の設定をし、より効果的に授業実践することを目指して取り組んだ。

R4の高等部研究部では、全校研究テーマにある「豊かな学び」を「卒業後の生活につながる力」と捉え、その力を育むために、前回の研究内容を踏襲しながら生徒の多様な実態に応じた自己評価の方法や指導のあり方についての研究を2年間（R4～R5）に渡って行うことと考えた。

2 推進計画

1年次

月 日	研究活動	内 容
4月21日	第1回全校研究会	
5月17日	グループ研究会①	研究の進め方について検討・確認
6月22日	グループ研究会②	研究内容の詳細について、小グループ編成
7月21日	グループ研究会③	自己評価シートの様式について提案、小グループごとに検討
9月5日	グループ研究会④	自己評価シート使用開始
10月26日	学部研修会	「卒業後に生かせる評価 —適切に自分を見つめなおすための自己評価の在り方について— 岩手県立総合教育センター 研修指導主事 福田要 氏
12月9日	研究授業	作業学習「環境班」、2A「現代文」
12月20日	グループ研究会⑤ 授業研究会	研究協議「生徒の実態に応じた自己評価の仕方、支援方法」
R5年 1月23日	グループ研究会⑥	グループ研究のまとめ
2月14日	第2回全校研究会	グループ研究の発表、全校研究のまとめ

2年次

月 日	研究活動	内 容
4月20日	第1回全校研究会	
5月17日	高等部研究会① グループ研究	今年度の方向性について 生徒の実態把握、目標の確認 研究対象生徒の選出
6月20日	高等部研究会② グループ研究	研究実践
7月19日	高等部研究会③ 授業研究会	A組授業・作業学習の参観、研究会

9月5日	高等部研究会④ グループ研究	研究実践
10月25日	学部研修会	「適切に自分を見つめなおすための自己評価の在り方」 岩手大学大学院教育学研究科 准教授 佐々木全 氏
12月19日	高等部研究会⑤ グループ研究	グループ研究のまとめ
R6年 1月23日	高等部研究会⑥	全校研究会に向けて 全校研発表内容検討・確認
2月20日	第2回全校研究会	高等部研究の発表、全校研究のまとめ

3 高等部における、目指す「豊かな学び」の姿

高等部は、卒業後の社会生活に向けた準備段階としての場であり、現実社会との関わりの中で、毎日の生活を築き上げていく場でもある。生徒は、様々な人と関わりながら学び、知識及び技能を習得することで、自ら学び考える力を身に付ける。この学びを通して、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、より良くしたりできることなどを実感することができる。こうした実感の積み重ねは、主体的な学びへと向かい、学んだことを人生や社会づくりに生かしていこうという意識や積極性につながっていく。生徒は、自らの学びを振り返り適切な自己評価をすることで、次の学びや未来へ向かって成長することができる。このような姿を「豊かな学び」と捉え、目指す姿とし、本研究を進めることとした。

4 1年次目の研究概要

生徒の多様な実態に応じた自己評価方法を工夫することにより、達成感や自己有用感をもつことのできる生徒像を目指し、グループに分かれて研究を行った。授業のふりかえりシートの作成や作業日誌の改善を行ったことで、生徒が自分の課題を明らかにし、何を頑張ればよいかの分かりやすくなった。そして、自信をもって自己評価を行う生徒が増えたという成果がみられた。その反面、まだ成果につながらない生徒や、障がいの程度が重く自己評価が難しい生徒がみられ、自己評価の規準の見直しや検討が必要なグループもあることから、研究を継続していくことが望まれた。

学部研修会では、「卒業後に生かせる評価～適切に自分を見つめなおすための自己評価の在り方について～」という演題で、総合教育センター 教育支援相談担当の福田要氏よりお話しいただいた。適切な自己評価（自己理解）やセルフマネジメントについての解説をいただき、自己有用感を育てることの大切さを再確認することができた。

5 2年次目の研究実践

(1) 研究方針

昨年度、生徒の自己評価の様子に着目し、支援方法の検討・改善に取り組んだ。具体的には、作業日誌や自己評価シートの様式を生徒の実態を考慮して検討したことで、生徒が自信をもって自己評価を行う様子が見られるようになった。この姿は、進路決定や卒業後の生活において重要な「自己理解」へとつながるものと考えられる。

しかしながら、自己評価と他者評価に大きな差が見られる生徒や、障がいの程度が重く、自己評価が難しい生徒への支援方法等に課題が残った。

そこで、今年度は、昨年度の研究内容を踏襲し、生徒一人一人の卒業後の豊かな生活につながる力を育むために、自己評価方法や指導のあり方について、さらに深められるよう研究に取り組むこととする。

(2) 研究実践の記録

月 日	研究活動	内 容
4月20日	第1回全校研究会	昨年度の全校研究の内容を確認
5月17日	高等部研究会① 全体・グループ研究	今年度の研究の方向性について検討・確認 生徒の実態把握、目標の確認、研究対象生徒の選出
6月20日	高等部研究会② グループ研究	対象生徒の実態把握、目標の再検討・確認
7月10日 ～14日	研究授業	調理班「お客様に喜んでもらえる商品(製菓・軽食)を作ろう」 農耕班「ニラの収穫と調整、販売準備」 環境班「モップのはこり取り」 縫製班「こぎん刺し・裂き織りをしよう」 工芸班「お客様に喜んでもらえる製品を考えて作ろう」 紙工班「パルプから紙を作ろう」
7月19日	高等部研究会③ (授業研究会)	研究授業の反省とまとめ、今後の取り組みについての確認
7月25日	高教研講演会	発達障害と愛着障害 ～見極めのポイント・支援のあり方～ 和歌山大学教育学部 教授 米澤好史 氏
9月15日	高等部研究会④ 学部研修	「適切に自分を見つめなおすための自己評価の在り方」 岩手大学大学院教育学研究科 准教授 佐々木全 氏
10月25日	高等部研究会⑤ グループ研究	「適応行動の習得と発揮のプロセス(実行機能)」をテーマに、対象生徒の つまずきや支援方法について確認
11月	授業実践	グループで話し合った支援方法で授業実践を行い、11月下旬をめどに結果をまとめる
12月19日	高等部研究会⑥ グループ研究	各グループ研究のまとめ(成果と課題)
R6年 1月23日	高等部研究会⑦	高等部研究のまとめ

(3) 研究授業

各作業班において、対象生徒に着目して研究授業を実施し、参観者から意見や感想を集めた。また、Aグループ(高等学校に準ずる教育課程の担当者グループ)においては、対象生徒の各教科における自己評価や今後の課題について話し合いを行った。

※各作業班の指導案については、研究フォルダを参照

ア 調理班「お客様に喜んでもらえる商品(製菓・軽食)を作ろう」

(参観者より)

- ・「自分の仕事が終わった時にどう動くか」「次の作業行程のことを考えて準備できるか」は、調理班ならではの生徒の課題だと思った。調理班の目標「自分から気づき～」にもつながる課題だと思う。
- ・生徒の動きが止まることが少なく、次の行動を考えて動いている姿が見受けられた。
- ・日誌が見開きで、ルーブリック評価がしやすい。

イ 農耕班「ニラの収穫と調整、販売準備」

(参観者より)

- ・朝礼の職員の話の中に、対象生徒の「自己評価の低さ」「自信のなさ」を指導する場面があり、生徒を気にかけ自然な流れで指導が行われているのがいいなと思った。
- ・対象生徒が前に出て挨拶確認をする際、落ち着いてはっきりと話することができていたので、これまでの指導や職員・仲間との関係、安心していられる環境ができあがっているように感じた。分からないことはすぐに質問できていたのも、発言しやすい良い環境が出来上がっているためだろうなと思った。
- ・自己評価について、「なぜ3をつけたのか」とオール3をつけていた生徒に対して理由を聞いている場面があり、いいなと思った。
- ・数字の評価が分かりやすく、生徒も数字の意味を理解して自己評価しているようだった。

ウ 環境班「モップのほこり取り」

(参観者より)

- ・生徒に合った日誌の様式で、記入しやすそうに見えた。
- ・ペアで共に作業するなどの工夫がたくさんあり、コミュニケーション力も育まれている。
- ・ペアでの作業は声を掛け合える人とそうでない人がいると感じた。
- ・本人が「3」、教師が「2」とチェックした場合など、具体的行動を共有することで、自分を見る力が向上していくかもしれない。

エ 縫製班「こぎん刺し・裂き織りをしよう」

(参観者より)

- ・対象生徒が、スキル面・態度面・前時の助言等を参考に、自分の言葉で記述できているところに驚いた。内面の眩きを言葉と文字で表現できる力、また、他の日の評価であるが、自己評価を、よくできた所・もう少しの所・さらに自分にはまだ難しい所を意識できているところがすごいと思った。
- ・前期の縫製班の目標と日々の目標とのつながりがある生徒が多かった。段階的に、具体的に自分を確認している様子も日誌から伝わってくる生徒がいて、勉強になった。

オ 工芸班「お客様に喜んでもらえる製品を考えて作ろう」

(参観者より)

- ・一人一人に合った作業内容、終わりが分かりやすく、次に何をするかの見通しをもちやすい環境づくりができているように思う。
- ・班内のグループの様子を伝え合う機会があっても良いかもしれない。
- ・目標記入について、前時を振り返ったり、今日の作業なら～する、と考えたりしているのだろうか。

カ 紙工班「パルプから紙を作ろう」

(参観者より)

- ・目標記入の際、前時を指し、想起を促すことで、今日の目標を具体的に確認していて、生徒と共有してできているように見えた。
- ・生徒一人一人がその日の作業を理解し、見学者がいても集中する姿は立派だった。
- ・ミキサーの音が苦手な生徒への配慮（ベルを鳴らす）が、皆も理解しているところは、4月からの積み重ねなのだろうと感じた。
- ・板書の作業予定、分担の表示が分かりやすかった。

キ Aグループ 「前期中間考査のふり返り」

- ・得意だと思っていた教科（自己評価を高めにしていた）にも努力を要する部分があると自己理解できていた。【図1】
- ・達成率が低かった観点において、どのように努力すべきかを分析できていた。
- ・日々の授業で評価が低いと達成率も悪い、それを考査までに解決する必要があったと分析できていた。

【数学II】

定期考査のふりかえり【~~数学I~~数学II】

氏名 _____

知識・技能	配点 70	実得点 38	達成率 48%	思・判・表	配点 20	実得点 9	達成率 45%	主体性	課題提出・出席率 B
-------	----------	-----------	------------	-------	----------	----------	------------	-----	---------------

これまでの「ふりかえりシート」の評価と照らし合わせてみよう！日々の授業の努力が結果に表れているかな？

達成率が高い観点	達成率が高い理由として考えられること
食言能力	特に思いがけず高い。
達成率が低い観点	達成率が低い理由として考えられること
思・判・表	時間いはい考えすぎておぼろげなところがあった。(とろろ)

次回の考査までに力をいれるべきこと！（これをがんばろう！継続していこう！など・・・）

今までで一番得意な教科の中で最低記記録した。
 1-2も50名を下回っていたため、数学が本気で得意、頑張らなくねえ。

自分では得意と思っていた（自己評価を高めに設定）教科にも努力を要する部分があると自己理解できていた。

【図1】 Aグループ 自己評価のフィードバック

（4）授業研究会

諸事情により授業研究会は実施せず、協議の柱 ア「対象生徒の自己評価に対して、どのような支援の工夫がなされていたか」、イ「生徒がより良く自己評価するための支援のアイデア等について」に対して、参観者の質疑・授業者からの回答をまとめ、定例学部研究会で共有した。

ア 対象生徒の自己評価に対して、どのような支援の工夫がなされていたか

各グループにおいて、振り返りの際に一緒に振り返ったり、じっくり振り返りができるように時間を確保したりと、振り返りに重点を置いた支援が共通してみられた。自己評価の低い生徒に対しては、成果の承認を意識した指導が行われた。

<作業班> 対象生徒	支援の工夫（授業者より）	
<調理> 3年女子	・日誌記入後に、生徒の記述について触れ、一緒に振り返る時間を設ける。	振り返りの支援

＜農耕＞ 1年男子	・生徒に対しては、その日、いつもより作業中の取り組みが評価できると感じた際に「今日の【協力・相談】は、評価を高くできるね」などと声を掛けている。	成果の承認
＜環境＞ 2年女子	・教師から、「良かったこと」「できるようになったこと」「次に頑張ること」について振り返りをしている。 ・「今日は～だったので～をすると良かったと思います」「これから気を付けるところは～ですね」など、I・Kと対話をしながら確認をした。	振り返りの支援
＜縫製＞ 2年女子	・自己評価後に教師との振り返りを行い、自己評価の見直しをした。	振り返りの支援
＜工芸＞ 1年男子	・報告を忘れがちだったため、工程の中で教師がチェックするポイントを視覚的に示し、報告を意識させた。 ・自己評価後に教師との振り返りを行い、改善点の気づきを促した。	活動内容の視覚支援 振り返りの支援
＜紙工＞ 1年男子	・学習を振り返ったときに思い出しやすいように、「良いところ」と「気を付けること」を1つずつ作業中に声掛けをした。 ・文章入力の時間を保障した。	振り返りの支援 振り返りの文章入力時間の保障
＜Aグループ＞ 3年男子	・自己評価の様式の工夫（ふりかえりシート） ・自己評価に対するフィードバックの時間の設置 ・「できる、できない、できるようになるために」を自分で考えられる学習活動の工夫	活動内容の支援 振り返りの支援 自己評価を振り返る時間の保障

イ 生徒がより良く自己評価するための支援のアイデア等について

目標の明確化、振り返り支援の強化、生徒の実態に合わせたさらなる評価方法改善・検討等が挙げられた。

＜作業班＞ 対象生徒	支援のアイデア（授業者・参観者より）	
＜調理＞ 3年女子	・一週間を通しての生徒の変容を、生徒と一緒に確認し共有する。	目標の明確化 振り返り時間の確保
＜環境＞ 2年女子	・授業終了時間の45分前に作業を終え、25分前には生徒は日誌（自己評価）を記入、その後、教師が評価する。評価の際、生徒と教師と一緒に振り返り、その日のうちに対話により確認し、課題点を少しでも早く改善できるようにする。	振り返りの強化 振り返り時間の確保
＜縫製＞ 2年女子	・ループリック評価ができる作業日誌を作成し、今後活用していく。	評価方法の改善
＜工芸＞ 1年男子	・「良い」「もう少し」「次がんばる」を具体的にイメージできるように、振り返りやループリックの使用などを取り入れてみたい。	評価方法の改善

<紙工> 1年男子	・チェック項目の自己評価を「○」と「×」（または△）の2段階にしてはどうか。または、「3、2、1」の点数で評価するのはどうか。今後、検討する。	評価方法の改善
<Aグループ> 3年男子	・ふりかえりシートに授業の目標や学習活動を記載、確認することで自己評価の観点を分かりやすくする。 ・定期考査後にフィードバックの時間を設けることにより、授業時の自己評価が適正か考えられるようにする。 ・「できるようになるために」の学習活動の工夫を指導者が行い、生徒と共に実践することで自己肯定感を得たり、学習方法の確立を目指したりする。	目標、学習方法、評価 規準の明確化 自己評価の適正化を 図る取り組み 自己評価を生かした 学習方法の確立

ウ まとめ

各作業班から挙げられた自己評価における支援方法や支援の工夫のなかで、他の班でも有効とみられるものは、次のとおりである。

- | |
|--|
| ① 目標の明確化（何を頑張ればよいか分かる）
② 自己評価方法の改善（ループリック評価や文章表現等）
③ 振り返りの支援（即時に振り返る、一緒に振り返る、じっくり振り返る等）
④ 成果の承認（自信をつけさせる） |
|--|

自己評価と教師による評価の差は、以上のような支援方法・支援の工夫で、縮まるのではないかと考える。自己評価の低い生徒については、「成果の承認」が最も有効であると考えられる。

（5）指導の経過（研究授業後の指導経過）

（4）授業研究会の「ウ まとめ」で挙げた①～④の項目の他、「環境の整備」（下線部）も有効な支援方法として各班で取り組んだことが分かる。

<作業班> 対象生徒	具体的な支援方法・改善してきたこと	授業研究会 「ウ まとめ」より
<調理> 3年女子	・教師間で対象生徒の実態の再確認を行い、理解を深めた。 ・できていること・できたことについて承認し、称賛した。 次に頑張ってほしいことについて伝えた。 ・対象生徒の個人目標を全体の週目標とし、仲間とともに意識の向上をねらった。	①・③・④
<農耕> 1年男子	・自信がもてるように、同じ作業内容を繰り返し担当してもらった。 ・より良い作業態度、動きが見られたら即時評価した。 ・準備物や作業の環境を固定し、対象生徒が自分のペースで力を発揮できるよう、メンバー構成を調整した。	①・③・④

<環境> 1年男子	※諸事情により、10月より対象生徒変更 ・グループ構成を工夫した。 ・態度面やルール等を全体で確認した。 ・自分の課題について振り返る機会を設けた。	①・③
<縫製> 2年女子	・成果を褒めて自信をつけさせた。 ・客観的の自己評価をねらい、作業日誌をループリック評価に変更した。【図2】 ・静かな環境を維持した。	②・④
<工芸> 1年男子	・対象生徒が飽きやすいため、2～3種類の作業内容を設定した。 ・内容は継続的に取り組み、前回の振り返りを生かせるようにした。 ・集中力が持続しない原因を正すため、生活スタイル・リズムについて考えさせた。 ・作業内容を段階的にステップアップさせた。 ・複数で取り組ませたり、リーダーを任せたりした。	①・②
<紙工> 1年男子	・前半、後半に振り返りの時間を確保した。 ・実習日誌に「うれしかったことややすかったこと」の欄を設け、豊かな振り返りができるようにした。【図3】 ・成果や課題について、場面に応じて繰り返し伝えた。	①・②・③・④
<Aグループ> 3年男子	・学習方法や問題の解き方について、教科の特性や生徒の実態に合わせて指導を行った。 ・ふりかえりシート（自己評価の様式）に、単元の目標や学習活動を載せ、生徒に付けた力と自己評価の観点を視覚化し生徒との共通理解を図った。 ・授業の自己評価と定期考査時の達成率とを比較させることで、適正に自分を評価できているかの確認をした。	①・③・④

作業日誌ふりかえりチェック(ループリック評価) <調理班>		作業日誌ふりかえりチェック(ループリック評価) <縫製班>	
評価(点)	見直しを整えて作業することができましたか	評価(点)	挨拶、返事ができたか。
3	見直しをきちんと整えて作業ができた。	3	自分から挨拶、返事ができた。
2	見直しについて自分で確認できないこともあったが、注意されてすぐに直すことができた。	2	先生に言われて挨拶、返事ができた。
1	なんどもまちがえたり注意されてもすぐに直さなかった。	1	挨拶、返事ができなかった。
評価(点)	ていねいに集中して作業することができましたか	評価(点)	集中して最後まで作業することができましたか
3	よそ見をしたり、おしゃべりをしないで、よく手元を見て丁寧に作業できた。	3	よく手元を見て作業ができた。
2	よそ見やおしゃべりをしたり、手元を見ないことが時々あり、丁寧に作業できなかった。	2	手元を見ないことが時々あった。
1	よそ見やおしゃべりが多く作業が遅くなって、先生に注意された。	1	よそ見が多く、先生に注意された。
評価(点)	安全に作業することができましたか	評価(点)	指示通りに正確に作業することができたか
3	周りに気をつけながら道具を正しく使った。	3	指示をよく聞き、一つ一つ間違えないように気をつけながら作業できた。
2	教えてもらったときに、すぐに直すことができた。	2	わからなくなったときにすぐに質問することができた。
1	道具を正しく使わなかった。教えてもらってもすぐに直さなかった。	1	わからなくても質問しなかった。
評価(点)	指示通りに正確に作業することができましたか	評価(点)	自分から報告できましたか
3	指示をよく聞き、間違えないように気をつけながら作業できた。	3	作業が終わったときに自分から報告できた。
2	わからなくなったときにすぐに質問することができた。	2	先生に声をかけられてから、すぐに報告できた。
1	わからなくても質問しなかった。	1	先生に言われても、すぐに報告できなかった。

【図2】調理班、縫製班 ループリック評価基準

■ 作業日誌							
日付	7	月	13	日	木 曜日	天気	晴れ
今日の目標	あいさつやへんじなど、まわりの人とせききよくコミュニケーションをとる。						
作業内容	前半	スタンプ押し				できたか?	48枚
チェックリスト	じこひょうか	先生から					
身だしなみ	○	○	よかったところ				
時間を守る	○	○	ものばしよを自分で考えてできました。				
正確さ	○	○					
準備・後片付け	○	○					
あいさつ・返事（へんじ）	○	○	きをつけること				
報告（ほうこく）	○	○	ものを準備してから作業を始めましょう。				
さいごまでやりつづける	○	○					
前半作業の反省 （目標の反省、よかったところ、きをつけること）	挨拶やへんじやほうこくをした。自分の道具は自分用にできました次回もがんばります。						
作業内容	後半	ミキサー				できたか?	
チェックリスト	じこひょうか	先生から					
身だしなみ	○	○	よかったところ				
時間を守る	○	○	りんさんiPadでお願いできました。				
正確さ	○	△					
準備・後片付け	○	○					
あいさつ・返事（へんじ）	○	○	きをつけること				
報告（ほうこく）	○	○	正しいブレーキをかけて作業しましょう。				
さいごまでやりつづける	○	○					
後半作業の反省 （目標の反省、よかったところ、きをつけること）	くるマイスのブレーキをけなかつたのでとまらなかつた。次はくるマイスのブレーキかけるようにきをつけてとまります。						

➡

■ 作業日誌							
日付	11	月	30	日	木 曜日	天気	くもり
今日の目標	道具のじゅんぴ、かたづけを自分から行う。						
作業内容	前半	製品作り				できたか?	10枚
チェックリスト	じこひょうか	先生の評価					
身だしなみ	○						
時間を守る	○						
ものをとおさなかつた	○						
からだの前でさぎょうした	○	教師からの評価は、前半は行わないことにした。					
顔を見て話しを聞いた	○						
あいさつ・返事（へんじ）	○						
報告（ほうこく）した	○	今日の作業で うれしかった					
今日の作業で	うれしかった						
僕はせいひんふくろづめ	うれしかった やすかった かなしかった たのしかった あたらしくおぼえた うまかった おもしろかった	さんできるようにがんばります。					
作業内容	後半					できたか?	10枚
チェックリスト	じこひょうか	先生から					
身だしなみ	○	○	よかったところ				
時間を守る	○	○	じゅんぴのときに、おきなケースをおとさないように気を付けてはこんだのがよかったです。ふくろづめ、いろやがらがちがうものをしっかひえらぶことができました。				
ものをとおさなかつた	○	○					
からだの前でさぎょうした	○	△					
顔を見て話しを聞いた	○	○	きをつけること				
あいさつ・返事（へんじ）	○	○	テーブルにまっすぐ入って、作業しやすいように気をつけましょう。				
報告（ほうこく）した	○	○					
今日の作業で	うれしかった	こと					
せいひんふくろづめ10枚できました次はたんくんさんできるようにがんばります。							

【図3】紙工班 作業日誌の改善

（6）生徒の変容

支援方法の改善により、意欲的に自信をもって作業学習や教科学習に取り組む生徒の姿が確認できる。

〈作業班〉 対象生徒	生徒の変容・成果
〈調理〉 3年女子	<ul style="list-style-type: none"> 「返事やあいさつ」を意識してできることが増えてきた。 指摘された時の不快そうな表情が減った。
〈農耕〉 1年男子	<ul style="list-style-type: none"> 見通しをもち自信がついて、必要な準備物に気付く様子が見られた。 自信がついて、自己評価が上がった。 自己評価と他者評価のずれがなくなってきた。【図4】
〈環境〉 1年男子	<ul style="list-style-type: none"> 進んで仕事を行う場面が増えた。 効率よく作業できるような工夫をしたり、丁寧に行ったりと、自信をもって取り組む様子が見られた。

<縫製> 2年女子	<ul style="list-style-type: none"> ・声が大きくなり、長く話せるようになってきた。 ・暴言が減り、精神的な成長が伺える。 ・見通しをもち、自信をもって取り組む様子が見られた。
<工芸> 1年男子	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返りを生かし、作業する様子が見られた。 ・ステップアップした内容に取り組むことが、作業意欲につながった。 ・自分から相談できるようになった。 ・リーダーとしての自覚をもって取り組む姿が見られた。
<紙工> 1年男子	<ul style="list-style-type: none"> ・作業中に教師から言われた課題について意識して活動し、日誌にも記入していた。 ・仲間との「協力」を意識して作業できるようになった。
<Aグループ> 3年男子	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査終了後、達成率を確認することで自分の課題を知り、改善策を考えることができた。 ・指導者の助言を聞き、ノート書き方等も変化があった。自己評価をすることで本人の学習に対する意識の変容が見られた。 <p>○生徒の自己評価、考査時のフィードバックを授業で行うことによって、指導者側の授業改善にもつながった。</p>

農耕班 作業日誌

9月29日 日曜日

作業内容
パズルの片付け

今日の目標
手戻り作業を減らす。

項目	自己評価	先生から
【挨拶・返事・報告】ができたか	2	3
【協力・相談・会話】をしてきたか	3	3
【集中力・体力】を切らさずできたか	2	2
【正確・スピード・安全】に気を付けてきたか	4	3
【時間・ルール】を守ってきたか	4	4
【準備・片付け・掃除】ができたか	2	3

できたこと・よかったこと・がんばったこと
パズルの片付けを減らしました。

注意をうけたこと・次に気をつけること
手戻り作業や返事が減りました。

先生から
自分に厳しい評価をすることが、可憐いですね！できていないものも、失敗していいからやってみて！「さ」(さっさと)でいいですよ！「あ」(あつち)でいいですよ！目標を高く設定してみてください。

→

農耕班 作業日誌

12月21日 木曜日

作業内容
作業

今日の目標
作業を早く終わらせる。

項目	自己評価	先生から
【挨拶・返事・報告】ができたか	3	3
【協力・相談・会話】をしてきたか	3	3
【集中力・体力】を切らさずできたか	3	3
【正確・スピード・安全】に気を付けてきたか	3	3
【時間・ルール】を守ってきたか	4	4
【準備・片付け・掃除】ができたか	4	4

できたこと・よかったこと・がんばったこと
作業が早く終わりました。

注意をうけたこと・次に気をつけること
前回は作業するスピードです。

先生から
早く作業を終わらせることが、いいですね！
次回は、どうしたらいいか、考え方を試してみてください！

【図4】農耕班 自己評価の変容

(7) 学部研修会

「適切に自分を見つめなおすための自己評価の在り方

—実行機能に関する知見に基づく指導仮説の提案—

講師：岩手大学大学院教育研究科 准教授 佐々木 全 氏

日時：令和5年9月15日（金）

場所：図書室

<内容>

生徒は自己評価をすることで、「適応行動の習得と発揮に資する自己調整」が可能となるが、そもそも自己評価とは、そのプロセスの一つの手順である。プロセスがうまくいかない理由として、a. 実行機能自体が未熟であること（加齢に伴い機能が低下する、発達の阻害要因がある）、b. 認知バイアスの影響（知的障がい等で行動と自己評価が一致しない）、c. 自尊感情に影響する自己評価「領域」の偏りが挙げられる。

生徒は a～c のどの理由でプロセスがうまくいかないのか、どの段階でつまづいているのか、そこをクリアするためにはどのような手立てを講じたらいかがかを教師は考えるとよい。その手立ては、成功体験の蓄積を保障する内容とすべきである。

このような支援により、生徒の「適応行動の習得と発揮に資する自己調整力」（実行機能）を育て、非認知能力を高められれば、職場や地域社会で豊かな生活を送ることができるだろう。

<Q & A>

Q. 言語化が難しい生徒（ある程度の指示理解は可能であるが表出言語はない IQ30 以下）が、自分の行動を振り返って自己評価を行うためには、どのような方法がよいでしょうか。

A. 適切な他者評価と素朴なセルフモニタリングの経験の蓄積が、自己理解としての基盤になると思います。人によって、自己理解を進めるのに必要な時間は異なるでしょうから、そこも見込んで着実な積み上げを支えていかれることが、回り道でも大切かと思えます。
知的障がい重度の場合、私たちは、その生徒に私たちと同じ表現方法での自己評価を求めることではうまくいきません。その生徒の表現や思考過程に見合ったものを「自己評価」として解釈（教育評価）することも、時には大切かと思えます。

Q. 実行機能自体が未熟で、適応に資する自己調整のプロセスが不調な生徒がいます。その生徒は、意に添わなかったり、フラッシュバックしたりすると暴れたりするのですが、自己評価が高く、機能的にできる場面を設定してもなかなかやりたがりません。それは、こちらがまだ適切な場を設定できていないということなのだと思いますが、どうしたら差を埋めていけるでしょうか。

A. どのような「反応」を示す人にとっても、育ちのメカニズムは、原則は同じだろうと思います。つまり、認知的には分かりやすい評価を、情緒的には受け止めやすい表現をということです。言うは易しですが、ここに先生方の工夫のしどころがあるのだろうと思います。ご検討を祈念いたします。

6 実践のまとめ

(1) 成果

- 声掛けによる確認や、視覚支援による「目標の明確化」により、何を頑張ればよいか分かり意欲的に作業学習や教科学習に取り組むことができた。
- ルーブリック評価や文章表現による、生徒が記入しやすい「自己評価方法の改善」により、的確な振り返りができた。
- 作業学習中に即時に振り返れるように、前半と後半に自己評価を2回設けたり、教師と一緒に振り返るようにしたり、振り返り時間をしっかり確保することで、自己を客観的に見つめることができた。
- 頑張りを認め成果を称賛することで、生徒は自信をもって作業学習や教科学習に取り組むことができた。

○作業環境を固定化したり、活動しやすいメンバー構成に調整したりすることで、安心して自分のペースで力を発揮することができた。

(2) 課題

- ルーブリック評価を活用しやすい作業日誌の検討の余地がある。
- 自己の課題を理解し、調整して実行する力をつける支援方法の検討が必要である。
- 卒業後の生活につながる力を育むためにも、作業学習や教科学習から視野を広げ、興味関心を深め、経験を拡大することのできる手立てを検討する必要がある。

(3) 終わりに

昨年度に引き続き、「多様な実態に応じた自己評価方法や指導のあり方」に視点を置き、研究実践を行った。今年度、また新たに対象の生徒を抽出し、研究グループのメンバーも変わったことから、支援の工夫やアイデアについて再度、検討を行った。定期的に話し合いを行うことで、指導者間の共通理解が図られ、対象生徒が徐々に自信をもち、意欲的に学習へ向かう姿を追うことができた。

今年度の課題であった、自己評価と他者評価の大きな差が見られる生徒や、障がいの程度が重く自己評価が難しい生徒への支援については、岩手大学准教授の佐々木全氏よりご教授いただき、我々の考えを整理することができた。適切な他者評価と自己の客観的な振り返り経験の蓄積が重要とのことから、自己評価方法の支援を工夫するなどし、それを実行できたと考える。

葉石・八島ら(2010)が、「教育支援との関連で実行機能を考える際、発達の遅れなどマイナスの側面ばかりでなく、特に問題がないとみられる点についての知見も見逃されるべきではない」、「教育支援においては、できないことへの配慮が中心になりがちであるが、できることに基づいて可能性を開拓することも大切である」と述べているように、我々は、生徒の良い面をさらに高め、生徒を主体的な学びへと導き、経験の拡大につなげられるよう、日々の教育活動に邁進していく決意である。

参考文献等

1. 葉石・八島・大庭・奥住・國分(2010)『知的障害児・者における実行機能の問題とその関連要因』
2. 葉石・池田・八島・大庭(2015)『知的障害者の実行機能と支援実践の課題』
3. 五十嵐・北村(2020)『知的障害児・者の実行機能の測定と支援方法』
4. 浮穴・橋本・出口(2007)『知的障害を伴う発達障害児の実行機能の特徴 ―ルールの切り替えを含む課題を用いた経年的視点からの検討―』
5. 文部科学省(令和3年3月版)『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料育成を目指す資質・能力と個別最適な学び・共同的な学び』
6. 国立教育政策研究所(平成29～令和3年度)『学校における教育課程編成の実証的研究主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について(検討メモ)』